
ダイアモンド

コルレオーネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイアモンド

【著者】

Z5959A

【作者名】

コルレオーネ

【あらすじ】

日々のフラストレーションはどんどん溜まっていく。何かをしなければ、でも何をすればいいのだろう。

蠅

部屋中に散乱してこらるゴミ、脱ぎ捨てられたジーンズや下着、無数に転がっている空き瓶や缶、何かが腐って、餽えたような臭いが部屋中に広がっている。

その中で、ゴミに包まれるよひに僕は寝る。午前2時、いつも湿気が多いと体中がベトベトする。もう夏が来るのか、春はあつという間に過ぎて行った。

僕は目を開けた。暗闇の中をパソコンの明かりが照らしている。パソコンの電源は基本的に切らない。どうせ電気代を払うのは僕では無い。僕が心を許せるのはパソコンだけだ。

なかなか寝付け無かつた。暑さや湿気のせいもあるのだろうが、おおかた奴のせいだ。

鈍い羽根の音、さつきから轟りしへ飛び回っている、糞みたく馬鹿でかい蠅。なんでわざわざ僕の近くを飛ぶんだろう、窓を開け放しにしているのに、ちつとも出て行こうとしない、何度も何度も壁にぶつかり、嫌な音を立てている。頭悪いんじゃないだろうか。蠅なんかいなくなつても誰も困りはしない。絶滅しちまえ、奴らなんか。糞つたれ、ぶち殺してやる。

僕は跳ねるように起き上がり、電気を付けた。薄い週刊誌を手にとり、クルクルと丸めていく。羽根の音のする方へ意識を集中させる。部屋の角の方で飛び回っている黒い塊を確認すると、息をひそめてゆっくり近づく。蠅が本棚へ止まる、その瞬間に、僕は一気に近づき、手に持っていた週刊誌を思い切り振り下ろした。

足元のゴミを踏み潰し、足の裏がベトベトになつた。週刊誌が本棚に当たり、ものすごい音を立てながら本棚は倒れた。本はもちらん、本棚の上に乗っていた日覚まし時計やらクロやらが勢い良く飛び散つた。週刊誌には蠅の痕跡らしきものは見当たらない。仕留める事は出来なかつたらし。

音に驚いたのか、母が部屋の様子を見に来た。その顔には恐れの色が見える。僕がヒステリーを起こして本棚をぶつ倒したのだ、とも思つてゐるのだろうか、馬鹿にすんな。

僕が母の問い合わせを無視し続けていると、何も言わず部屋から出て行つた。気が付くと蟻はいなくなつていた。僕は電気を消し、布団に包まる。あつという間に眠る事ができた。

その日も僕は夢を見なかつた。楽しみにしていたのに。最近夢を見ることが少なくなつた気がする。

シアラトウストラはかくも語りす

目が覚めると、もう毎過ぎだつた。窓からはカーテン越しでも思わず目を閉じてしまうくらい眩しい陽射し。カーテンを空けると、気持ち悪くなるくらい良く晴れている。ただ真っ青な空、それと地平線に沿うように雲の塊が積み上がっている。入道雲だ。

ちきしう、これじゃあまるで夏じゃねえか。

本棚は倒れたまま。中の本があちこちに散らばっている、落ちている目覚まし時計の針は微動だにしない。それもそのはずだ。二つある電池の片方が飛び出してしまっている。

あれだけ派手に倒したからなあ。しかし、蠅を追い掛けたあげく本棚をぶち倒した僕つて、本当に異常なんだなあ。

そう思うと、なんだか可笑しくなってきた。笑いが込み上げてくる。思わず顔がにやけてしまう。そしてとうとう、堪え切れず吹き出してしまった。一度笑い出してしまつとなかなか治まらなかつた。何度も何度も、昨日の自分を思い出して笑つた。何となく学校を中退し、職にも就かずダラダラ日々を過ごしている僕が、唯一感情を剥き出しにして熱中するのは、蠅を退治する時だけだなんて、傑作だ。ギヤハハハ。

笑いは思い返す度にやつてきてなかなか去つてはくれなかつた。

僕の人生なんてこんなものだろう。感動や悲劇なんてものとは全く無縁、色んな人から笑われ、蔑まれる喜劇そのもの。人は、あまりにも悲しいと、泣くのを通り越して笑いしか出てこないもののか。そして、最後には感情すら風化して行くのだろう。- - -なんて、ちゃちな哲学めいた事まで考えてしまつ自分に気付くと、また一層笑いが込み上ってきた。

腹筋がツツつて苦しい。頬の筋肉も痛くなつてきた。それでも笑いは途切れる事を知らない。一人で笑いのツボにハマリ、しかも、その理由が自分の滑稽さによるもの。なんて、他人が今の僕を見たら

何を思うのだろうか、もはや救いようがない。

そこまで思うと、急に冷めてきた。笑いが去っていくのが分かる。さつきまで悶絶していたのが嘘のようだ。

どうか、気持ちを冷めさせるには他人の目を気にすればいいのか。確かに他人の気持ちを考える、なんて、この上なくくだらない事だからな。

僕は窓から外を見た。空模様や気温はすっかり夏そのものだが、蝉の声が聞こえない。その様子は、どこかアンバランスに感じた。

いの先、希望なんて何も無いのに生きていってどうするんだ。以前こんなことを考へるようになつていて。

考え始めると止まらない。僕の意思とは別に、勝手に頭が働いてしまつ。特に寝る時が酷い。

電気を消し、ベットの上で横になる。真っ暗な部屋の中、うつすらと浮かぶ天井の輪郭を眺めている。すると、来るのはだ。何処からともなく、途方もない絶望感や孤独感。

目を閉じると、瞼の裏に見えるのは真っ黒に塗られた未来。途方もない四次元の闇が足元に迫つて来ているような気がした。

一時期は軽い不眠症のようになつていて。ずっと考えて眠れず、気が付くと朝日が昇つていてる事すらあつた。

なんでこんな事になつてているんだ？いつの間にか前にも後ろにも進めず、闇に押し潰されそうな感覚。

僕は社会に上手く適応できず、何をやるにもやる気が起きなかつた。だから時の流れに身を任せたが、闇は濃くなるばかりだつた。

僕は苦しみ続けてきたが、僕にはこの苦しみを語り合える人がいない。誰も僕の声に耳を傾けてくれないのだ。

親は僕の叫びを聴いてくれない。いつも僕の顔色を伺つてばかりだ。きっと僕の事を異常だと思つていてるに違いない。

学校の教師は腐つた連中ばかりだった。頭ごなしに叱る事しか知らない単細胞ばかりだ。

僕には友達らしい友達はいなかつた。誰も僕を相手にしてくれない。適当に相槌を打つて流す奴ばかりで、真剣に僕の声を聞いてくれる奴など一人もいなかつた。空氣に話してるんじやねえんだぞ、畜生。

結局、僕は孤独だ。自分の傷を自分で舐めて癒すしかない。周りはバカばかりだ。僕がこんなに苦しんでるのは他人のせいだ。

ある日、僕はこの苦しみから一時的に和らげる方法に気付いた。それは物語を想像すること。日本中のバカをぶち殺す。肉をちぎり、骨を碎き、はらわたを引き裂き、脳みそをぶち抜く。バカにつける薬は無い。そして最後に、バカ共の屍の上で日本一のバカ、つまり僕が、自分の頭に拳銃をぶつ放す。そこで僕の物語は幕を閉じる。初めてこの物語を想像した日の夜は気持ち良く眠れた。しかも楽しい夢まで見ることができたのだ。鳥のように自由に空を飛ぶ夢。久しく夢を見てなかつた僕は、とても幸福な気分になつた。

そして、僕は毎晩、この物語を想像するようになつた。想像した後は、いつも決まって気持ち良く眠れた。そしてあの夢も見る事ができた。僕は毎晩寝る時が楽しみになつていった。

物語の内容も日を追う毎に鮮明になつていった。

チラチラと横目でこちらを伺つてくるバカな親をぶち殺し、偉そうに見下してくるバカな教師を叩き殺し、作り笑いを浮かべながら、あーそうだよねー。うん、わかるわかる。なんてほざいているクソバカ共を虐殺する。

そしてそいつらの死体の山に僕は佇んでいる。真っ赤な夕日をバックに、辺りは血の臭い。僕はこめかみに銃口を当てる。陽の光を全身から感じて、僕は目を細める。そして僕は引き金を引く。短く響く銃声、その瞬間、僕は鳥になり夕日に向かって飛んでいく。

いつの間にか、僕は眠つてしまつていた。僕はこの時、この物語が生きる糧になつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5959a/>

ダイアモンド

2010年11月21日02時28分発行